日本経済新聞　2009年1月22日掲載

今、若者たちへ

次世代に贈るメッセージ

スターツコーポレーション
会長兼グループCEO
村石久二さん

「人が勝ち組・負け組などという言葉を使うのはいかがなものか――」。こう力説するのは、スターツコーポレーション、村石久二会長兼グループCEO（最高経営責任者）。「人間大好き」が言葉の底にも、経営の根幹にも流れている。成熟した日本社会にあって、若者たちはひたむきな努力を続ける気持ちを持ちながらも、競争社会の価値観に染まらず、自然体で生きようと呼び掛ける。

肩ひじ張らず普通でいいじゃないか
愚直でひたむきな努力にエール送る

むらいし・ひさじ　1963年大和銀行（現りそな銀行）入行。69年同行を退社し、千曲不動産創業。87年スターツに改称、社長。2000年同社会長兼グループCEO。05年からスターツコーポレーション会長兼グループCEO

競争の価値観から脱し もっとたおやかに進む

今の若者たちに一番贈りたいのは、「自分なりでいい」「普通でいいんだよ」というメッセージです。これは何もせず気楽にいこうという意味ではありません。若者が夢を抱くことは良いこと。でも、成功やある地位に就いたりすること自体が目指すものになってはいないでしょうか。もし、無理をしたようなものであるならば、そんなことよりも、努力しようというひたむきな姿勢こそが大切だということを伝えたい。

戦後再出発した日本は、混迷の状態から抜け出し、欧米に追いつき追い越せとばかりに突き進んできました。経済も政治もトップダウンの下で奇跡的な高度成長を成し遂げました。しかし、急激な発展は、世の中を豊かにしたものの、一気に競争社会へも導いたのです。

「競争」は活性化の源でもありました。しかし、バブル崩壊後の失われた十年、その後のグローバリゼーションと大きく時代が変化していく中で、日本はその競争価値観から転換しきらないうちに今日に来てしまったように思います。

だからこそ、若者にはもっとたおやかに進んでほしい。そう願うのです。

「人間的な会社をつくる」その思いを胸に会社興す

私は長野県の商業高校を出て銀行に就職し、二十四歳で不動産会社を興しました。母親孝行をしたいというのが原点です。同時に夢の実現を心に誓いました。それは、様々な人がそれぞれの個性や事情に合った働き方ができる広大な牧場のような会社をつくること。しかも、合理主義でなく、ヒューマニズムにあふれ、人間がそのまま企業になったような会社。そんな中で自分より優れた多くの人に囲まれながら大きな仕事がしたい。

経営学者が唱える既存の理論にはないような人間ありきの経営でも永続するような企業になれる。それには、百人二百人といった規模ではなく、一つの地方自治体のような企業を五十年かけてじっくりとつくりあげて、企業社会に一石を投じられるような人間になりたい。

こうした信念にも近いものを持ったのも、生まれ育った境遇と無縁ではないでしょう。

人と別れるのが嫌い 苦楽を共にした4人

私が生まれる前に父が中国で戦死し、母は、疎開先で女手ひとつで姉たちや私を育ててくれました。特に近所の方々や学校の先生には本当に助けられました。ですから周りの人々への感謝や、助け合いの心の大切さといったものは幼いころから身に染みて育ったと思います。

当社は今年三月で創業四十周年を迎えますが、「人が、心が、すべて。」という基本理念は片時も変わっていません。

いつの間にかリストラが特別なものでない時代になってしまいましたが、当社には初めから、社員を「切る」「捨てる」といった考えはなく、「拾う」「救う」の哲学で事業を広げてきました。生来、私は人と別れるのが嫌いなたちで、社員に辞められるのがとてもつらい。特に、退職の報告や書類を目にしたときは、理由がとても気になるし、自ら電話で確認することもたびたびです。

また、創業期から苦楽を共にしている四人の同志のうち誰一人として離れていくことなく、がんばっていてくれる。これもスターツならではの側面です。

企業はいろいろな人の集まり。企業が人を育て、また人が企業を活性化させる、その繰り返しです。社員の中には、業績を上げる人もいれば、そうでない人もいます。なのにそれがすべてになったり、経済価値をどれだけ生み出せるかが、その人そのものの評価になったり、動機付けの材料になっていないでしょうか。会社全体が持続的な成長を遂げていくために、果たしてそれが良いのか。私は、人間が本来持っている生き物としての自然なモチベーションを大事にしていくべきだと考えます。

様々な個性の持ち主が、共生している――当社はそんな自然の一員としての人間社会そのものの会社でありたいのです。

実際、社員たちと別れたくない、適材適所で個々の力を生かしたいという思いが原動力となって建設・不動産・管理を核に、金融・コンサルティング、高齢者支援、出版・メディア、ホテル・レジャーとグループ事業を多角化してきました。

ですから、若い人たちにも、自分なりのモチベーションを維持しながら、自然体で働いてもらいたいと思います。

私は、何よりも体験を重視します。言葉も、見聞して学ぶことも大事ですが、若い人たちにはまず体で感じ取るということを大切にしてほしい。その点、私にとっては十五年前から続けているマラソンは格好の機会です。三十、四十キロ歩くのでもいい。長距離は、才能の壁を努力で越えていける余地が大きいので、とにかく日々の積み重ね以外にありません。練習がつらいからとさぼってしまうと後が怖い。結果を維持したり、向上させようとするならば、汗をかく以外にないことを身をもって学べるのです。走ることで等身大の自分というものを謙虚に見つめるようになります。

長距離競技のイメージが企業理念と重なることから陸上部を創部。昨年、全日本実業団女子駅伝へ初出場、応援に駆けつけた社員たちと

歴史の大きな流れの中では 今の価値観も小さなもの

当社の社員や役員の中には、休暇のつど世界各地を訪ね、数千年にわたる歴史・文化を見聞している人たちがいて、帰国したての新鮮なうちに話を聞き、勉強させてもらっています。旅を通じて地球の悠久に思いをはせ、また自分の持ち場に戻ってきっちりと仕事をする。そんな彼らにしなやかさを感じざるを得ません。

人間は、いつの時代も宇宙の摂理の中で生かされている存在。常日ごろ頭にあることでも、違った角度でまた気付かせてもらえる貴重なひと時です。

人類の歴史という視点に立てば、時代の一単位は千年。三千年、五千年といった長い歴史の中でみれば、今の社会において勝ち組といわれているような価値観も一瞬にすぎません。

経済の一単位はせいぜい百年でしょうが、その時間軸を持ってぶれない経営をすれば、自身が望むような企業をつくることができる。事業を始めた当初は観念的に思っていたことが、社会、人、そして自身の体験を通じ肌で感じることで確信へと変わってきました。

長い歴史の中で考えると、人間の能力の差などというものはないも同じ。

周囲に支えられて伸びる 自然体で生きる若者応援

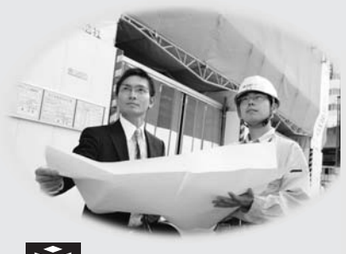
周囲の優しさを感じ、感謝しながら、少しでも役に立とうとひたむきに、コツコツと努力を続けることができる人。そんな人こそ、周囲にかわいがられ、支えられて伸びていくように思います。その中からリーダーに押し上げられる人が出て、専門分野で強みを発揮する人、陰で支える人と、共にお互いの持ち味を生かし合う企業へ。

「愚直」という言葉が私は好きですが、これまでお伝えしてきたようなことを私自身、愚直に貫き通して四十年がたちます。

私をよく知る人たちは「スターツのような経営は、村石さんじゃなければできないね」と言ってくれますが、特別なこととは思わず、人として自然体であること、そんな若者を応援したいと思います。

広　告
企画・制作
日本経済新聞社クロスメディア営業局

STARTS



土地有効活用の
トータルソリューションをご提案します
［スターツCAM株式会社］

賃貸・売買 ピタットハウス
ホスピタリティーあふれる
総合不動産ショップ「ピタットハウス」
［スターツピタットハウス株式会社］

SECURITY ON BILCOM
ビル管理の視点から、オフィスや商業ビルの資産価値向上をプロデュース
［スターツファシリティーサービス株式会社］
BILMEISTER

家庭的な雰囲気でくつろげる
高齢者介護施設
［スターツケアサービス株式会社］
グループホーム きららケアホーム うららら

携帯小説からシニア向けフリーマガジンまで
時代に即した情報を発信
［スターツ出版株式会社］
OZ magazine

総合生活文化企業　スターツ
www.starts.co.jp